All be there for you.

銀城 時雨

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無気力関西弁少年が今、日本一となった誠凛高校に牙を剥く。

過去あり少年と愉快な仲間たちによるシリアス。

目次

約束 ―― 1
こんにちは ―― 3
第3話 ―― 5
4話 ―― 7

約束

『――――――――アホやなぁ』

そう呟くことしか出来なかった。花束が置かれたそこにお揃いのストラップ。鈴がついててカラカラと音が鳴った。

『俺もお前もホンマにアホやで。しゃあないから俺がお前のユメ叶えたる。やからお前も俺の夢叶えてな?約束やで?』

言葉が返ってくるわけもないのに呟いた。涙1つ出ない俺はとても中途半端だ。

『お前のリストバンド持ってくで。おまえがコートにいるっつーのも感じてたいし?』

ゆうてて照れるわこんなん、と言いながらも顔の表情筋は動いてはくれない。頭の中では今でも鮮明に笑顔のお前が思い出せるのに、目の前にあるのはちゃちな花束だけ。

「うちは、お前のプレー好きやで?孤高の戦士って感じやん?まぁ名前は物騒やけどな!」

これで、思い出すのは最後にする。

『見とれよ!空にいんのか土にいんのか知らんけど俺が1番や。キセキの世代?アホか。才能に頼らななんも出来へんやつなんか目じゃないねん。こちとら”悪魔”と契約しとんねん。負けるわけあらへん。』

高校は桐皇学園かな。まさかキセキなんかこの学校に来てへんやろ。

「ウチな!バスケで日本一なるのが夢やねん!ウチめっちゃ上手いやん?楽勝や思うとってんけどなんかアホなガングロが思うたより強くてな!負けてもうてん!いいライバルが出来たわ!あ、もちろんお前が1番やからな?嫉妬すんなよ?」

『うるせーよ。俺バスケしてねぇし。』

「それ言うたらあかんって!なんでお前はサッカー好きやのにバスケが上手くてウチはバスケ好きやのにサッカーうまいんやろうな?」

『俺に聴くな。』
「ほんま、なんの因果なんやろか。」
『因果とかいう言葉お前知ってるんだな。』
「はぁー!?知っとるし！馬鹿にすんな！」
『実際馬鹿だけどな』
「キィーー！」
　馬鹿な言い合いがどれだけ楽しかったか。とりあえずなりますか、日本一。やる気も元気もないけどなるっていう選択肢しかないからね。お前に顔向け出来ないし。
『てか、桐皇ってどこやったっけ。こっちか？』
　今日入試なんだよなぁ。今までバスケしてなかったからバスケ推薦枠なんかないわけだし。頭でってなるとまぁ普通に勉強しなきゃ行けないんだけど。だって俺頭良くないし。悪知恵は働くって言われてるけどね。あ、心の中で思ってるのと言葉に出すので違うじゃんって思ってる人。俺ね、目的達成出来るまではアイツと一緒にいるつもりになりたい訳。だからね、あいつの言葉を借りてるの。関西弁なんか喋れないと思ってたけど意外といけるね。ってかほんとに学園出てどこなの？
　結局この日に着くことは出来なかった――――――――。

こんにちは

結局昨日つかなくて普通に入試バックレちゃったみたいになってたけどちゃんと説明したんだけどもう1回試験を受けることは出来なかったんだよねぇ。だからね、推薦枠でいこうと思って今バスケ部に向かっております。いや学園内まで入れたら勝ちでしょ。体育館目指せばつく筈だしね。

昨日なんて桐皇行こうとしてるのに秀徳とか誠凛に着いちゃうんだよねこれは入るなってことかな？桐皇に。でも頑張って人に聞きながら言ったわけ。結局入試の時間には間に合わなかったから家に帰ったんだけど家を探すのも大変でね。一人暮らしするために借りたマンション見つからないんだよねー。んでやっと見つかったと思ったら桐皇学園なんだよね。もうねため息がでたよ。よく見たらその近くにマンションあったしね。もう疲れたよパトラッシュ……。

そんなこんなで家に帰って中学に連絡入れたらめっちゃ怒鳴られたよね。お前バカかよって言われたよね。まぁでも入れる自信はあるよ。なんてったって日本一になるんだからね。

『ちゅうか、体育館が見やたらへんねんけど。どこや？』

あー、あれか？多分あれやろ？

ガラガラ

『こんにちわぁ？監督さんっていらっしゃる？』

「こんな所でどーしたん？なんや迷子か？」

『昨日入試受けれへんかったからバスケ推薦で行こうと思ったんやけど』

「経験者か？俺は見た事ないが…」

『あー安心し俺初心者やから。』

「ふぅーん？初心者でここ入ろうと思ったん？しかも推薦で？えらい自信あんねんなぁ？」

『そりゃあもう満ち溢れてるで？自信に。』

あ、てかこの人ら先輩じゃん。

『とりあえず自己紹介した方がええ？それとも実力見せた方がええ？』
「ほんま、君らの時代ってなんか生意気なん多ない？まぁええかお名前教えてくれる？」
『姫柊深紅（ひめらぎ　しんく）っつーねん。よろしくなぁ？ポジションはオールラウンダーやからどこでもいけるで？そやなぁ、座右の銘は、飴と鞭。好きな食べ物はプリンの下にある茶色いカラメルで嫌いな食べ物は焼き魚やな。表情筋全然動かんから分からんやろうけど今せーいっぱい笑ってるんでこれからは、よろしゅうな！』
「ワシは主将の今吉翔一や。早速やけどなんかやってもらわなな？やっすいパホーマンスじゃあ満足できひんで？」
「副主将の諏佐佳典だ。」
「２年の若松考輔だ。あんまり舐めた態度してるとシバくぞ！」
『うわ、うるさ…』
「んだとコラァ！」
『まぁぼちぼちやりますよーと。あ、そうだボール貸して？』
　技とか使うまもなく入れる。そう、体育館の入口から、最も遠いゴールまで。
『どお？距離的には問題ないやろうし、まだパホーマンス見たい？』
　みんな一斉に黙る。たぶん、緑くんだったっけ？キセキの。そいつ思い浮かべてるんだろうけど違うんだよね。
『納得出来てなさそうやし、ちょっとだけ奮発するわな？』
『テキトーなところにボール投げて貰ってええか？』
「はい！」
　俺とは真逆のとこに投げる。おうけい。
『第３、色欲。』
「っな、」
　そう、真逆にあったはずのボールが、気付けば俺のところにある。何故なんだろうか。とか考えてるんだろうなぁ。愉快愉快。
『どお？これで戦力にはなるんちゃう？』

第3話

静まり返るコート。

「今、第3って言うたよな？じゃあ何個ぐらいあんの？今みたいな人間業超えてるの」

『うわ鋭いやん。七つの大罪っつー技やねんな？これ。だから7個あるで？今のは色欲。性欲、色や形を持つものに執着することが意味やねんけど、この技は簡単に言えばボールに好かれるっちゅーやつ。どんなに離れた場所にいても気付けば磁石のように俺の手の元に行くねん。やけどデメリットもあって、これは敵味方関係なくボール奪ってまうねん。だから味方がシュート打ってもし何らかの理由で俺が発動したらそのシュートから外れて俺の元に戻ってきてしまうっつう奴。』

まぁ現実離れした技だとは思う。だけどこれは何かイカサマをしてるとかじゃなくてただただ運の問題。百発百中で俺の手元にボールが帰ってくるっていう運なだけ。

「って言うことは傲慢、暴食、色欲、強欲、憤怒、怠惰、嫉妬の7つって言うことだな。一つ一つ説明して言ってくれないか？」

『んー、してもええけどこれでもし、ここの高校入れへんかったらただただネタバレしただけやから色欲だけな？すまんで、諏佐先輩。』

「あえて色欲っちゅうことは1番弱いって言うことやな？」

『もーほんと今ちゃんセンパイ怖いんやけど。めっちゃ読まれてるやん。そう、1番使用頻度少ないねんコレ。だって1番意味ないやん？ボールに好かれるって。しかも俺がシュート打っても入らんと返ってくるしな。シュート出来ひんのがしんどい。』

パチパチパチ

「私から学園に説明しておきましょう。なかなかの才能をお持ちですね。」

『俺的にはサッカーの才能の方が欲しかったんやけどねぇ』

まぁ今日はこれくらいかな。そう言えばバッシュも履かずにやっ

てたけど良かったのか？まぁなんも言われないならいいか。
『じゃあ今日のところは帰るで？正式に入学出来たら敬語で話すわ！』
　さよならーと、歩いていったけど。
「そっちは校舎の方ですよ。」
『えっ!?ちょおだれか俺を玄関まで送って！もう道がわからん！』
　プロフィールに方向音痴が追加されたのでした。

「カントク。あいつ、姫柊敵に回したらやっかい、と言うより勝率がだいぶ下がることになりますわ。出来れば身内にしたいんやけど」
「そうですね、こちらに来てくれて助かったとでも言っておきましょうか。これが秀徳などの所に行っていたらと考えるととてつもない悪寒がしますね。」
「青峰と姫柊……お互いに個性が強い反発し合わなければいいけどなぁ」

４話

あれから何とかして家に着いた、と言いたいところだが、
『ここどこや？』
見知らぬバスケのコートの場所まで来てしまった。ほんとにここどこ。
「すみません」
『うぉぉおっ!?なんやオバケか？幽霊なら君はもう死んでいる（？）』
びっくりした！気配がまるでなかった……。やはりこいつ…出来る……!?と、まぁ悪ふざけは置いといて。
『で？なんの用？ウチに話しかけたってことはなんかあるっちゅーことやろ？』
「１ｏｎ１してもらってもいいですか。」

俺も表情筋のこと言えないけどこいつもなかなか無表情だな。
『ええけど…ウチ強いで？』
冗談抜きにしても。
「いいんです。ぎゃくにその方がいいです」
１ｏｎ１してるんだけどこの影うっすい名も知らない少年めっちゃバスケ下手くそなんだよなぁ。大丈夫なのか？ていうか同い年か？質問は山ほどあるけどとりあえずハンデとして俺は動いてないんだ。１歩も。なのにボールが取れない、となると究極的にバスケに向いてないかあるいは”パス専門の選手”かのどっちかだ。

この少年としては普通の選手でいたいのだろうがこう言っちゃなんだが向いていない。だがその影のうすさは武器になる。むしろもう自分でも気づいているんじゃないのか？だったらなんの為に？まぁいいか。どうせたたきつぶすだけだ。跡形もなく。
「深紅には、わからへんねん。凡人（ウチら）みたいなやつの気持ちなんか」

凡人の言葉が耳につきささる。彼の言葉は俺を深く傷つけもしたがそれ以上に俺を癒してくれたのは事実だったのだから。写真越しで見つめる目と目は交わることは無い。わかっている、わかっているんだけれど。

『っと、集中しなあかんよな？』

でも君バテてるし今日はこれくらいで帰ろうかな。ちょうど体もあったまって来たところだけど。

『残念やけど時間切れや』

結局1度も俺からボールを奪うことなくこのゲームは終了した。

「はぁ、はぁ、君の名前はなんですか？」

疲れ切った様子の君をみて笑って

『姫柊　深紅。あだ名はよくヒメって呼ばれてんで。君は？』

僕は黒子テツヤです。そう言った君は相変わらずの無表情だった。なんか、すっごいバスケ好きなんだろうなって感じ。

『高校生？どこの高校なん？』

「誠凛です。姫柊くんは？」

『誠凛かぁ、聞いたことあらへんなぁ。ウチ？ウチは桐皇やで。』

「…青峰くんといっしょ、ですね。」

あおみねぇ？知らんなぁ。

『ウチ日本一なるのが夢やねん。夢って言うより目標、やな。』

突然話し出した俺をじっと見つめる黒子くん。

『なんや、キセキの世代って騒がれとるやつらいるんやろ？ウチより強いんかなぁ。ウチを本気にさせれるやつ、いるんやろうか。』

黒子くんに話しているようで話してないんだけどね、これ。